

## もうすぐ「鳥取市水道復興100周年」

地元小学校の遠足先と言えば、「鳥取砂丘」だったという方も多いと思います。実は、鳥取砂丘が遠足の目的地となる以前は、「美敷水源地」が遠足先でした。最近では、小学校の社会科見学先として「江山浄水場」や「秋里下水処理場」の学習とともに、水道の歴史や先人たちの活躍を学ぶことを目的に訪れる学校が増えています。

来年(2022)は、鳥取市水道復興100周年にあたります。今となっては、蛇口をひねれば当たり前になる「水道水」ですが、その安定的な確保には先人たちの並々ならぬ努力がありました。

山陰地方に初めて現代のような「水道」が作られたのは、今から100年以上前の大正4年(1915)になります。それまで、鳥取市街地の飲料水のほとんどは、鳥取城の外堀にあたる袋川の水に頼っていました。しかしながら、袋川の水質は飲料水として決して好ましい状態とはいええず、安心して飲める水の確保は急務でした。明治45年(1912)、鳥取市は市の年間予算の5倍の費用を投じて、山陰初の近代水道施設の建設に乗り出します。

時は、「文明開化」から「純国産」に移り替わろうとする時代。近代水道施設のほとんどが外国人技術者によって設計されるなか、「美敷水源地」は日本人として初めてその技術を習得した三田善太郎が、設計を指揮します。そして大正4年(1915)、鳥取市は国内では早い段階で「純国産型」の近代水道施設を完成させます。

ところが、完成から3年が経過した大正7年(1918)。大型台風の襲来によりダムが決壊し、下流部の集落を流失する悲劇が起こります。多くの犠牲者を出すとともに、長期にわたって飲料水を提供できない事態に陥りました。二度とこのような事故が起こらぬよう、鳥取市はより堅固なダムとするため、当時まだ事例の少なかったコンクリートダムの建設を計画。設計には日本初のコンクリートダム建設に従事した佐野藤次郎を起用します。復旧に要した費用が施設建設費と同等の額に及ぶ大工事の末、大正11年(1922)美敷水源地は再び給水を始めました。

昭和53年(1978)に施設が休止するまでの間、市民の飲料水として用いられたほか、陸軍第四十連隊駐屯地への供給や山陰本線を走る蒸気機関車に給水するなど、市内だけではなく山陰地方の近代化に大いに貢献しました。平成4年(1992)に水道施設としての機能が完全に廃止されますが、日本の近代化を象徴する三田善太郎設計の施設は、国の重要文化財に指定されるとともに、佐野藤次郎設計のダムは「砂防ダム」として補強され、ともに地域のために今も活躍しています。

鳥取市教育委員会



■ 決壊前のダム取水塔の建設(大正2-4年)



■ 決壊したダムと応急給水の様子(大正7年)



■ コンクリートダム建設の様子(大正8-11年)



■ 水道復興に尽力した関係者たち(大正11年)